

# 平成 30 年度第 1 回 豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会議事概要

日時：平成 30 年 10 月 9 日（火）  
午前 10 時～11 時 50 分  
場所：豊能町役場大会議室

○午前 10 時開会

【1】あいさつ・出席人数に基づく会の成立の確認及び傍聴承認（4 名）

【2】出席者紹介

【3】議事（報告）

- 1 人口推計について（資料 2（p1～4）により説明）
- 2 豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略について（資料 2（p5～13）及び資料 3 により説明）
- 3 【地域ぐるみの定住促進】について（資料 2（p14～24）及び資料 3 により説明）
- 4 【農×観光戦略】について（資料 2（p14～24）及び資料 3 により説明）

【4】その他

（なし）

○午前 11 時 50 分閉会

## 平成 30 年度第 1 回豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会主な意見の整理

### 1 人口推計について

(委員)

- ・ H27 年が特に減少している要因は

(事務局)

- ・ 周辺地域は上昇し、本町や能勢町は下振れしている。相続税の改正等の外的要因があるのかもしれないが、住宅着工件数等との関連性も調べたが、要因がよくわからない
- ・ 人口規模が小さいゆえに周辺との相関もわかりにくい

(委員)

- ・ 周辺地域の増え幅と町の減少幅が同じならば周辺地域への流出という要因がわかるかもしれない。又当初推計の H22 の状況が影響しているかもしれない、その場合は減少幅が緩やかになる傾向にあるのではという可能性も出る
- ・ 町内地域別の状況がどうなのか、どこの地域の人たちがどこの地域へ行っているのかを見ることで関係性、要因もわかるかもしれない
- ・ 人口規模が小さく、他の自治体と分母が違うので影響が大きくなる可能性も。(社人研データだけでなく) 自分たちで、地域別の状況を丁寧に調べ、地域ならではの推計、見解も必要

### 2 豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略について／3【地域ぐるみの定住促進】について

(委員)

- ・ 様々な活動が地域にはみえてこない。トライアルステイも、地域との人と会うこともない
- ・ 地域で活動をしていても、地域に人は来ると自分たちは迷惑をこうむるということは見えても、プラスになるということが全然見えてこない。合意形成はできず、資金も不足。だから続いていかない。このままでは何も変わらないのではないか。
- ・ 町民を巻き込んだ議論としてはどうなのか

(事務局)

- ・ トヨノドリームについては自治会応募も期待していたがそれはうまくいかなかった
- ・ 地域課題を地域が解決することがこれからの道と思っている
- ・ トライアルステイについては外から来た人が町を発信してくれることを狙っている。シティプロモーションの意。地域と溶け込むところまではいかないかなと思っている。地域とのつながりは大切に、交流も図るべきとも考えている

(委員)

- ・地域に伝わっていないということだと思う。地域としてどうしていくべきか、という議論がない
- ・内閣府では社会インパクト評価(※)ということが言われている
- ・いちどみなで出し合って、本当の長期的な成果は何なのかを腹をわって話せばよいと思う
- ・(トライアルステイも)シティプロモーションであることは理解していても、実際どういう思いだったかをフォローしていくことも必要
- ・自治会単位でディスカッションを。(トライアルステイは)個人資産を使用するということもあるので、自治会会員以外の人も含めて話し合いをすればよかったかもしれない
- ・こうしたい、ああしたいという議論は合意ができないという研究結果がある。これだけは防ぎたい、これだけはやめようということのことを議論、共有すればよいのでは

(※注釈(後日事務局追記))

内閣府「社会的インパクト評価に関する調査研究」(調査目的)より

<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/sonota-chousa/social-impact-hyouka-chousa-h27>

人口減少・高齢化が進展する中、複雑化・多様化する社会的課題に対応するためには、従来の行政中心の取組だけでは限界があり、人材、資金といった民間の資源を社会的課題の解決に呼び込む必要がある。そのためには、現在、共助社会の担い手として社会課題の解決に取り組んでいる団体の活動によって生み出される社会的価値を可視化し、団体内でのPDCAサイクルの円滑な実施等による事業の検証やそれを用いたステークホルダーへの説明につなげていくこと、すなわち社会的インパクト評価が定着することが不可欠である。

(委員)

- ・先日秋祭りがあった。トヨノレポーターが熱心に取材していた。まず、より多くの人を集めようというグループもあった。祭りの実施の中心人物は40~50代。その人たちの考え方が、よその人は来てほしいと思っていない。(続いてきたものを)守るべきものというイメージ。(上の年齢の人たちが)その人たちを説得しなければならないという状況
- ・これまでの高齢者がいなくなったら、かわるのか思っていたが、これまでと同じ
- ・(トライアルステイも)集会をして町から語る必要がある

(事務局)

- ・地方創生推進交付金は、H32年度以降も戦略ができるかもしれないが、国の交付金がなくなっても伸ばしていこうと思っている
- ・住民へのお知らせの仕方には課題がある
- ・昨年町長がタウンミーティングを実施した。地域による地域おこし、地域防災をテーマに意見を出し合った。しかし住民は、それらは行政のしごとであり、まずは行政が企業誘致、人口増加策をすべきだという議論ばかりであり、地域による地域づくりの話にはならなかった。

(委員)

- ・これまでは、ひとつひとつの事業は説明があったが全体像が見えていなかった。資料3でよくわかった
- ・(地域の活性化は)条件に達しているところが先行して行っていく。条件が整っていないところは無関心等になるなど、ちぐはぐが生じるのは当然
- ・トヨノドリームがいくつか出て具体化されている地区もある。西のよそのものと、地域の農家や自治会と手を組んでやっており、そういう意味では他の地域と少し違う。他の地域と比べても先行しつつあるという実感はある
- ・ある限られた地域のマイナス面をみせるよりも、うまくいっているポジティブな面を議論していけばよいのではないか

(委員)

- ・資料3は全体像が見えている。まずは、これらの関係者全員が集まる場があってもよいのでは
- ・少なくともその人たちはアクティブに動こうとする人たち。その中で、自分がその中でどういう立ち位置なのか、場合によってはこういうやり方をすればうまくいくということに気づくことなど、最初の、モチベーションを上げる雰囲気をつくるのが良いと思う
- ・地域の温度差は、総合戦略に限らず色々な部分であると思う。なかなかうまくいかないところは、そのような土台(集まり)ができた中で、何らかの対応をしていく
- ・そのようなポジティブに動ける場を作り、そのあとで、今度はうまくいかない人たちにも参加する、又は見ていただく、こういう動きがありますよ、というのを見る場、聞く場を作っていけばよいのではと思う
- ・今は、国のお金があるからできている。それは事実、あると思う。お金が無かったら一切しない。であればチャンス。その中でトヨノドリームはすごく良いと思う。ただ、プレゼンテーション審査員の立場で自治会なども入れればよかったのではないかと。地域のキーパーソンになっている方々に審査していただくということ
- ・その審査員となる地域の人たちが今までやってきたことはすごくよいこと。ただ外部から来る人は違うやり方をしてくると思う。そこで地域の人たちは何かを感じていただく場となるということといいと思う。その場で感じてすぐ動く必要があるということではない。審査員として、自分たちはこういう活動もしてきた、だからこういう評価もする、ただ、こういう考え方もあるのだな、という気づきの場になる。審査が気づきの場になるので、地域の人たちが入ってくれば良いのでは
- ・次に、評価の問題がある。実施した結果を報告する場が出てくる。その際に、資料3の関係者が出てきてもよい。このようなチャンスを最大限地域に落としこんでせるような場を作ればよいのではと思った

(委員)

- ・地域を変えていくにはいろんな取り組みを起こしていくことも大事だが、その後の相互学習、新しい種を作る場が必要
- ・トヨノドリームが来年も続くのであれば、良いことも、悪いことも含めて、採択された方、採択されなかった方々を含めて、こういうことをしたらこうなった、ああなった、それによって種を作る、そういう会があっても良いのではと思った

(委員)

- ・事業継続について、町として支援媒体ということは準備されているのか
- ・もちろん事業としてパッケージされたものが採択されたということだと思うが、実際運営している中で足りないスキル、資源も見えて来ると思う
- ・いま、まちづくりにおいて中間組織のメタな支援が必要であると自分でも感じている
- ・支援を受ける立場の人たちも、さらに支援をする町もどこからか支援を受けられるのか、コンサルという意味ではなくて、そのあたりの支援を積み重ねていく必要があつて、それができてはじめて地域にその資源が提供されていくのではないかと、自分が関わっているところでも感じている
- ・私は昨今の、出生率の話とか、健康に関する行政の介入、町が何とかしてくれ、という声はあるが、わたしとしては行政の介入は、怖い。個人の分野になぜ権力の分野が入ってくるのか。大げさかもしれないがその危機感、居心地の悪さは感じている
- ・直接的な介入ではなくて、自分たちができるようになる支援をするというのが、住民が下で、行政が上というわけではないが、階層構造としては、上へ上へ支援をするスキルを上げていくようなものがあるのではと感じている

(事務局)

- ・ドリームは単年度事業ではあるが、それでは終わらない場合もある。来年度、新規ドリームをやりつつ、積み残しの支援も残しておかなければならないか、というところも含めた制度設計しようか、と考えているところ
- ・裕福な財政でやっているわけではないので、新しい交付金制度が続くことを大いに期待しているけれども、仮にそれがなくとも、町が単独でやるべきことは当然やっていく
- ・ただ、このプランは自立支援を主にしているもの
- ・これらは、そのスタートの時期だというように位置付けている。そういう視点で制度設計はやっていく
- ・来年度の審議会ではお示ししなければならないとは思っている

(委員)

- ・同じような意見ではあるが、町がレポーターを集めて事業をするのではなくて、インフラを作ってもらえればと思う。インフラ設備のないところで人が増えたら必ず出てくる問題
- ・そのようなインフラを与え、そこで自立しなさい、ということならできるが
- ・地域ができることと、行政ができることのレベルを変えて行わなければ、土台がないのに上ばかりやっているという、上滑りしているような感じを受ける。トヨノレポーターのようなことをせずに、地盤をちゃんと作ってもらえれば、その上活動ができる。それは資金はいらない
- ・ただ、駐車場などは地域だけでできることではない。お金だけの問題ではない。ベースをちゃんと作って、“踊りなさい”ということであれば、動く人も出てくると思う

(委員)

- ・財政が厳しい中、インフラ整備こそお金がかかって難しい
- ・たぶんそれが全域でできないということが悩ましく、かといって個別の地域に限定してということも難しい
- ・整備しているからそこで活動ができるという考え方もあるのかもがあるが、たぶん行政的に言うと、必要という声があるから動くという、どっちにボールがあるのかという議論があつて、そこは地域から投げていかないと、なぜ行政がそこでやるのかということになっていまって、その部分がどこも解決できない状況で、結局は均一になってしまつて集中的にできないということになっているのではと思っている
- ・個人的には“踊るんだ”、“踊れるんだ”ということを先に出していくほうがよいと思う

(事務局)

- ・関係者の情報共有の場については、昨年度シティプロモーション戦略会議を立ち上げた。今後はまさに、ここに(資料3)に載っている人たち、活動者が集まり、まず皆が何をしているのかを語る、その上でどういうプロモーションができるのか、どういう方向に向かっていくことができるのかということが語れる形にしていく場を作る。またそこでつながることで、何か新しいことが生まれたりであるとか、マネタイズをどうしていけばよいのかといった話もしていきたいと今考えているところ
- ・地域の活動が地域の人たちに見えにくいのではないかと、というところで言うと、なかなか全部を細かく説明する、ということは難しいかもしれないが、今回のドリームに関しては、3月に「フェス」をやろうと考えている。ドリームをかなえた人たちが、自分たちの活動を見てもらう、宣伝する、成果を見てもらうということをやろうと思っている。または、参加者はドリーム関係者でなくてもよいのかもしれない。その中にマルシェという形式をとっているのので、地域で活動している人たちが「自分たちがこんなことをやっているんだ」ということを何らかの形で表現できるというものにもしていきたいと考えている
- ・来年のドリームの設計について。確かに今回採択されなかった人たちもいた。実際どうやったら夢がかなうのかがわからない人たちも当然いると思う。そういう意味で、どのような形になるかはわからないが、次のドリームを募集する前に、もしくはドリームの説明会でドリームを実現した人たちの体験報告会といったものをやりたい、というふうに考えている
- ・中間組織の可能性については、トヨノレポーターとトヨノドリームの設計をしていく際に、大阪府立江之子島文化芸術創造センターなどに相談する際、こちらから、京都にあるSILK、社会課題を新しいやり方で解決していく人たちを支援する中間的な組織や、長岡市にある、若者しごと機構、これも中間組織として、長岡市から独立して、若者が仕事づくりをしていくための組織、マネタイズの勉強をしたり金融機関が入って支援する、情報発信をしていく組織があり、そういった組織ができればよいな、というところの話をした
- ・その中で、SILKの方からキーマンがいるのか、という話が出てきた。組織のキーマンとなるような人はいない状況であったので、まず人材発掘をするところからはじめる必要があり、そのやり方として、シティプロモーションというもともとの課題設定があつたので、シティプロモーションの視点から人材発掘をやっていくことになった。
- ・また、地域による総合戦略の推進のアクションプランを進めなければならないという中で、タウンミーティングを実施したところ、なかなか自治会単位でこの事業を動かしていくことの難しさを感じたところ

る。であれば、なにかやりたいことがある人たちを集める、地域で自分たちの課題を楽しみながら解決していきたいという人たちを発掘して応援していく、それがトヨノドリームになって、そこからはじめていくということで今年度進めている。

・そこからどういう中心的な人材を発掘し、組織化し、マネタイズしていくのか、そして公でもない私でもない共空間をどのように作っていくのかということが今年度から来年度にかけての課題になっている。そのことも大阪府と共有しながら進めているという状況

(委員)

・ドリームに対し費用支援も行っているところだとは思いますが、採択者が自立していくことが目標のひとつだと思う。その際に何らかの組織で対応していくということはひとつあると思う

・その視点で、ドリーム採択者のうちどの程度自立をしていくのか。またどのような基準で自立という者を考えているのか

・それ次第で、本当にそのセンターのようなものが必要なかどうか、京都市や大阪府、神戸にも KIITO があるなどいろんなところで取り組んでいる。ただ、それぞれ、かたち、性質が違う。なので、自分たちが「自立」として考えているもの、それに沿った組織にしていくということを考えてほうが良いと思う

(事務局)

・トヨノドリームでは個人の自立を支援しているというような方々が審査していただいたので、自立が可能であると審査した結果、採択されたものと思っている

・どれだけ自立できるのかはわからないが、短期のうちに、ノウハウ、資金だけでなく、考え方、経営の仕方など、そういうところまで、コンサルや審査員を通じて支援をしていくので、すべての方が自立できるように、とは思っている

(委員)

・それは、経常収支を見ながら、慈善活動ではなく、せめて“トントン”をしていただく、計画どおりにいけば、とんとんになっていくのではないかという視点ではないかと思う

・ではそれを今後も支えていくというような状況を作っていくということの受け止め方で良いか

・であれば、そのような考えが、すでに町の中にある他の団体に対しても、少なくとも必要であると思う。なので、ドリームの波及効果、このような審査で採択された、このように実現しましたなどのノウハウを身につけていただく、何らかを感じていただくという場も必要なのではないかと思った

・実際資料3以外の団体以外もあると思う。否が応でも人口が減っていく中で活動も難しくなってくる。そうすることで(ドリームに対する)投資以上の成果が出てくると思うので、そういったところも配慮いただければ

#### 4【農×観光戦略】について

(委員)

- ・新規就農者は農業で生計をたてることができるのか
- ・事業に対するマーケティングがざっくりしていて、わかりにくくなっている
- ・若い人を引き込みたいのか、退職者なのか、わかりにくい

(事務局)

- ・専門を目標としている人を支援することを目標としている。ただ定年退職者も含めて考えている
- ・実質的には難しいところもある。1年目の人が2年目にも参加している状況もある
- ・実際に農地を借りてスタートした人もいる
- ・広報をしたり、町ホームページで募集しているがうまくいかない。大阪府の農業希望者や農業大学校にアプローチしているところ。ポイントは絞っているつもりではあるが

(委員)

- ・情報がとどかない、というのは興味のない情報は、受け取った側にとっては「ない」ことになっている
- ・情報媒体は持っているが、もっと具体的にターゲットを絞ったほうが良いのでは

(事務局)

- ・実際は絞っているつもり。若い人と定年後地域に帰ってきた人。農地はあるが、ノウハウが継承されていない

(委員)

- ・実際、専門でできるのか

(委員)

- ・今は一定の規模がないと専門は難しい。ただ、この町の良いところは、涼しいところ、それにより収穫のサイクルが他地域とずれること。消費地が近く、多品種の農業でやっていくとよい
- ・しかし、専門ですべてをすることはむずかしくなっている。
- ・高齢化が進み放棄地は増えている。2年たつと農地は復活するのは難しい。だから、退職して、年金をもらいながら、戻ってきて、又は外からやってくる人への就農支援は無駄な投資ではないと思う
- ・専門ということはできないということはないと思う。グループを作ればできるかもしれない。町では専門はまだ数件しかない。だからリタイア帰農者支援、耕作していない土地の利用、出口としてのチャレンジショップそれらは意味があると思う

(委員)

- ・近郊というターゲットがある、(事業の)ステップは明確化している。それをマネジメントできることが必要。そのサポートを行政としてどう考えているのか



- ・ターゲットを地道に広げる、的を絞ってお金の使い方を絞り込んでいく必要がある。まず、近郊帰農者ならばそこを重点化するなどが必要
- ・P D C Aにおいてプランは幅広くなると Do も広くなる。そうすると、チェックもできなくなってしまう

(委員)

- ・年金を農業に投資する人はいない。趣味の範囲ならOK。ただ、ルールを守ったり、グループを組んでいるところは地域にうまく溶け込んでくれる
- ・そこで問題になるのが、移動手段。作業の後電車に乗ると汗臭い、ということもあり車利用に。やはり、駐車場が必要。シャワールームを作ってはどうかと考えたことも
- ・そのために田んぼ1つでもつぶしてすればよいのでは。町がお金をださなくてもよい。裏に町がバックアップしていることを影でもわかればよいのではないのか

(委員)

- ・観光戦略については高山ばかり。お金をたくさん入れて、費用対効果、事業効果はどれぐらいあるのかは疑問。吉川に観光に来る人には、高山右近生誕の地を見ていきたいという人たちもたくさんいる。しかし移動手段がなく行けない。それはビジネスチャンスを逃している
- ・前から妙見口発の高山へのガイドツアーをしてはどうかと言っているがすすまない
- ・新しいモビリティの可能性はないかと、トヨタ財団に電話したことがある。しかしそれは行政や自治会から提案するように言われ、その話は終わってしまった
- ・小豆島や横浜など、超小型モビリティの実績があり、日産のものもある
- ・観光戦略への補助金があるのであれば、そのような使い方もあるのではないのか。

(委員)

- ・公共交通は運転者不足が問題。お金を出しても何もできない状況が出てきている。モビリティがあっても自分で運転するという。これは難しい問題。
- ・今は、公共交通においてお金だけでなく、人がいないということが問題。その中で観光に振り向けられないところが問題。本当の自動運転はもっと先の話になると思う。この地域は実際離合しにくいところもあり、自動運転より超小型モビリティなどの方になっていくと思う

(委員)

- ・豊能町はニュータウン地域、旧村があり様々なものがある。箕面森町の新しいところも開発され、いろいろあるので難しいが、おもしろいことができるのでは。意見を聞いて金融機関としてできることもあるのではないかと思っている

(委員)

- ・当社なりに議論しているのは地域経済の循環をどうするのかということ。地域のお金の循環が少ないということが問題になっている
- ・お金の流出が少ないと人口流出が少ない

・「本社は田舎に限る」という本を読んだ。徳島に本社を移したある IT 企業の話。都会で事業を拡大しようとして採用をかけても集まらない。そこで徳島に行った。「都会では週末しかできないことは毎日できる」ということを売り文句にした。それで採用問題は解決。さらに、地域に溶け込むこともできた。祭り、草刈りなどの活動や、認知症徘徊支援なども行っている。地域問題を解決する会社もたちあげた。そのようないい循環ができたらいいと思っている。

・地域の中で雇用の場が必要と思っている。鉄道事業者だがそのような手伝いができれば

(委員)

・細部についてはいろいろあるが、まず、成果として住民に打ち出すこと。ただ、今は単に情報を出していくということも難しい。物語的に発信していく方法でなければならないのであろうと思っている。成果や失敗を個人に帰着するのではなく共有するということが大切。農×観光戦略も同じことがいえる

・次年度まとめあげていくというところだと思う。できれば次のまちのあり方を考えることができればと考えている

・事務局には本日の議論を真摯に受け止めてほしい